

2020年5月10日(日)「空<sup>くう</sup>の根源」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 1:2-11

《新改訳 2017》伝道者の書 1:2-11

2 コヘレトは言う。

空の空、空の空、一切は空である。

3 太陽の下、なされるあらゆる労苦は、人に何の益をもたらすのか。

4 一代が過ぎ、また一代が興る。

地はとこしえに変わらない。

5 日は昇り、日は沈む。

元の所に急ぎゆき、再び昇る。

6 南へ向かい、北を巡り、巡り巡って風は吹く。

風は巡り続けて、また帰りゆく。

7 すべての川は海に注ぐが、海は満ちることがない。どの川も行くべき所へ向かい、絶えることなく流れゆく。

8 すべてのことが人を疲れさせる。

語り尽くすことはできず、目は見ても飽き足らず、耳は聞いても満たされない。

9 すでにあったことはこれからもあり、すでに行われたことはこれからも行われる。

太陽の下、新しいことは何一つない。

10 見よ、これこそは新しい、と言われることも、はるか昔、すでにあったことである。

11 昔の人々が思い起こされることはない。

後の世の人々も、さらに後の世の人々によって、思い起こされることはない。

2 空の空。伝道者は言う。

空の空。すべては空。

3 日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。

4 一つの世代が去り、次の世代が来る。

しかし、地はいつまでも変わらない。

5 日は昇り、日は沈む。

そしてまた、元の昇るところへと急ぐ。

6 風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。

7 川はみな海に流れ込むが、海は満ちることがない。川は流れる場所に、また帰って行く。

8 すべてのことは物憂く、人は語ることさえできない。目は見て満足することがなく、耳も聞いて満ち足りることがない。

9 昔あったものは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。

10 「これを見よ。これは新しい」と言われるものがあったも、それは、私たちよりはるか前の時代にすでにあったものだ。

11 前にあったことは記憶に残っていない。これから後に起こることも、さらに後の時代の人々には記憶されないだろう。

## 【序論】

コヘレトの言葉（伝道者の書）は「**空の空**」という衝撃的な人生観・世界観の提示でもって始まります。人生を「空しい」と感じたことのない人に対しても、「いや、人生とは空しいものではないか」と、一面押し付けるかのように語り手の世界観に引き込もうとすることです。疑い深い読者なら、問い返すでしょう。「本当にそうだろうか」「空しいと思っているのはあなただけではないのか」「何を根拠に空しいと言うのか」。そのように、私たちも一度は反対意見を自分の中で思い巡らせてみることも大切でしょう。また、今日の箇所全体を読むときに、この世での労苦は何の益ももたらさないとか（3節）、この世界に新しいことは一つもないとか（9-10節）、死んだ人は思い起こされることはない（11節）など、悲観的な物言いがたくさん出てきますが、これらの言葉には反論が出てもおかしくはありません。労働に喜びを見出す人もいれば、科学文明の発達は常に新しいものを生み出していると言えるでしょうし、歴史に名を残す人もいるわけです。重要なことは、語り手が言っている言葉の中に含まれている普遍的真理（どの人間にも、どの時代にも共通して当てはまる部分）を見出していくということです。この偉大な知恵文学からのメッセージを聞き逃すことがないように、著者との対話を楽しみつつ、耳を傾けてまいりましょう。

## 【本論】

### 本論 1. 空の空

**空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。**（1:2／新改訳 2017）

原文の冒頭には「**空の空**」（הַבַּל הַבָּלִים）という言葉がドンと置かれていますので、語順としては新改訳の方が雰囲気を読みやすいでしょう。「空」（הַבָּל／ヘベル）という言葉は「蒸気」「息」「空虚」といった意味を持ち、実態がなく手で掴むことのできないものというイメージがあります。地上の一切の出来事をそういうものだと見なすのです。高橋秀典先生は「何と空しいことか！」と訳しておられます（『正しすぎてはならない』より）。

人の人生と地上の営み全般についてこうまで言い切ることでできる著者は、どれほどの悟りの境地に達していたのでしょうか。少なくとも、人生を謳歌している若者の口からはなかなか聞かれない言葉かもしれません。私などは、クリスチャンホームに育ち、聖書的な価値観の下にずっと生きてきたため、「人生とは空しいものだ」と言われてもなかなかピンとこない面がありました。ある注解者は「伝道者の書について注解できる者は、多分こ

の世に幻滅や嫌気を感じて反感を抱いたことがある皮肉屋だけだ」「自分にはその資格がある」と言っています (M. A. Eaton)。この世に対するそれほどまでの幻滅や嫌気を感じた者でなければ本書から語れないなら、私にはその資格はまだ十分あるとは言えないのかもしれない。人生経験が浅く、とても著者ほどの思索をしてきたとは言えないからです。しかし、聖書読者は高齢者に限定されるものではなく、子どもにまで読まれるべきものであるとするならば、あらゆる世代の人がこの著者の世界観に巻き込まれてみて、彼の言っていることを理解していくという道があるはずです。

「הַבֵּל／へベル」という言葉は本書のキーワードであり、旧約聖書の中で 73 回出てくるうちの 38 回を占めています。しかし、興味深いことに、この言葉は聖書のかなり早い段階で登場してきているのです。それは、人類の第二代目の「アベル」という人物の名前においてです。少し創世記の記事に触れておきましょう。創世記 3 章で、アダムとエバが罪を犯し、エデンの園を追われたというストーリーは何度もお話ししてまいりました。この夫婦はその後、子をもうけ、まずカインという息子を得ます。「カイン」とは「所有」という意味を持つ名前です。その後、夫婦はもう一人の息子を生まれました。この息子に「アベル」という名前を付けたのですが、その意味するところが「空しい」であることを考えますと、一体どんな意図でこのようなかわいそうな名前を付けたのかと訝しい思いになります。おそらく、アダムとエバは一人目の息子が生まれたときに、一つの淡い期待を胸に抱いたのではないかと。自分たちは神に対して罪を犯したが、息子は神の御前に罪なき人生を歩んでくれるのではないかと。罪は自分たちの代で断ち切られてほしい…と。しかし、カインが成長していくと、彼の内に自分たちと同じ罪の性質があるのを目の当たりにするようになった。「ああ…やはりダメだったか」という失意から、次に生まれてきた息子には「この子もそうなのか…」という諦めの思いで「アベル」(息、霧、空虚)という名前を付けたのではないかと想像いたします。

「空」(הַבֵּל)の根源を辿っていきますと、人が神から離れた時点に到達します。アダムとエバの罪によって「地は呪われた」という表現が出てくる(創世 3:17)。そして、人は一生苦しんで食を得なければならぬと。更に、汗水垂らして糧を得ても、最終的には塵に帰ることになるとも(3:19)。人は死ぬべき存在となり、短い一生の間苦勞をした挙句、何も残すことができない…。これが創世記 3 章から始まった人生観なのです。そして、この人類が生きる世界は、正しい管理がなされないために「虚無に服している」ということをパウロも述べています(ローマ 8:20)。本来あるべき秩序が破壊され、被造物全体がうめき苦しんでいると。その結果が地球温暖化であり、環境汚染、生態系の混乱、手に追えないウイルスの蔓延、戦争、貧困、不正、人権侵害…等々であります。

## 本論 2. 「太陽の下」の人生

太陽の下<sup>もと</sup>、なされるあらゆる労苦は、人に何の益をもたらすのか。

一代が過ぎ、また一代が興る。地はとこしえに変わらない。

日は昇り、日は沈む。元の所に急ぎゆき、再び昇る。

南へ向かい、北を巡り、巡り巡って風は吹く。風は巡り続けて、また帰りゆく。

すべての川は海に注ぐが、海は満ちることがない。どの川も行くべき所へ向かい、絶えることなく流れゆく。(1:3-7/聖書協会共同訳)

3節の冒頭に出てくる「太陽の下<sup>もと</sup>」(「日の下」新改訳 2017) という表現も、本書における重要なキーワードです(29回)。これは、地球上に生きる人間が活動する場のことではありますが、ネガティブなイメージが暗示されている。つまり、「神なしに生きる人間の活動の場」という意味で言われているのです。言い方を変えるならば、神なしに生きたらどういう世界観になるかということが教えられていくのです。

### ①太陽の下、なされるあらゆる労苦は、人に何の益をもたらすのか。

これについては、「必ずしもそうではない」という意見が出てきてもおかしくはありません。人は信仰を持たずとも、働く喜びや社会に仕える喜び、あるいは何かを発見し開発する充足感を見出し得るからです。しかし、コヘレトは言います。神なしにはそれらは空しい結果に終わるのだと。なぜか。それらが永遠とのつながりを持っておらず、やがて朽ちゆく「地上だけの活動」となるからです。神への賛美が抜けているならば、人は何も永遠に残すことはできないのだと。

### ②一代が過ぎ、また一代が興る。地はとこしえに変わらない。

ここでは、大地はずっと変わらないのに対し、人間は実に短いスパンで世代が入れ替わっていくことが表現されています。文字通りに読みますと、ここで言われていることは必ずしも正確とは言えないかもしれません。「地はとこしえに変わらない」と言われてはいますが、地も刻々と変化をしていますし、やがて終わりを迎えます。しかし、これは詩的表現であって、人間の一生のはかなさを強調しているに過ぎません。

### ③日は昇り、日は沈む。元の所に急ぎゆき、再び昇る。

太陽は 365 日同じように現れては地平線の彼方に沈んでいく。もちろん天候によっては見られない日もありますが、ここではそういうことが言われているわけではありません。太陽の行路が変わることなく、延々と同じ動作を繰り返すその単調さが強調されているのです。単調なサイクルの下に生まれてきた人間は無目的にその流れの中で生きているに過ぎないと。

④南へ向かい、北を巡り、巡り巡って風は吹く。風は巡り続けて、また帰りゆく。

風の向かう向きも、実際には様々でありますから、これも文字通りに捉えればよいというものではありません。その強調点は、風は基本的に一年の間に、ある時期には同じように流れるということが言われているのです。これも、太陽の行路と同じように、ただ繰り返すだけのものであると。

⑤すべての川は海に注ぐが、海は満ちることがない。どの川も行くべき所へ向かい、絶えることなく流れゆく。

これは、ほぼ正確なことが言われているでしょう。水の行き先は海であり、その海の水は水蒸気となって天に昇り、また雨となって降り注ぐ。そのサイクルが延々と繰り返されていることが強調されています。

このように、様々な自然現象の単調なサイクルの中で人間が生きていること、そして死んでいくことが事実として明らかにされているのです。語り手が言わんとしていることはこういうことでしょうか。「どうだ、読者諸君。あなたの人生とは、大宇宙のサイクルの中にたまたま現れた空しいものに過ぎないではないか。あなたはその儂い人生を終えて死ぬだけの存在ではないか」。しかし、語り手の言葉の裏には別のメッセージも隠されています。「もし神なしに生きるなら」という前提があるのです。

本論 3. 新しきものはなし

すべてのことが人を疲れさせる。

語り尽くすことはできず、目は見ても飽き足らず、耳は聞いても満たされない。

すでにあったことはこれからもあり、すでに行われたことはこれからも行われる。

太陽の下、新しいことは何一つない。

見よ、これこそは新しい、と言われることも、はるか昔、すでにあったことである。

昔の人々が思い起こされることはない。

後の世の人々も、さらに後の世の人々によって、思い起こされることはない。

(1:8-11/聖書協会共同訳)

ここでは、何事も完全には満たされ得ないということ言われています。

①すべてのことが人を疲れさせる。

楽しいことは疲れしないよ、という反論があるかもしれませんが。しかし、ここではそういうことが言われているのではなく、人がやがて老いていくこと、生きるということ自体が億劫になっていくことを言い表しているでしょう。高齢化社会となった現代日本において

は、80歳を過ぎて働かなくてはならない現実もあります。

②語り尽くすことはできず、目は見ても飽き足らず、耳は聞いても満たされない。

これには誰もがアメンと頷くものではありませんか。人生を語り尽くすことはできませんし、欲望には終わりがなく、知識はどれほど得ても十分でないばかりか知らないことがますます出てきます。

③すでにあったことはこれからもあり、すでに行われたことはこれからも行われる。太陽の下、新しいことは何一つない。見よ、これこそは新しい、と言われることも、はるか昔、すでにあったことである。

これもその通りかもしれませんが。結婚も出産も、争いも不正も、災害も病気も…。形は時代によって多少変わっていくかもしれませんが、根本的には同じことが同じ惑星の上で行なわれ続けている。IT革命などは近年起きたことではありますが、人類が何かを発見し、よりスピード感のある便利な社会を作ろうとするという点においては同じだということです。「多くのことは、単に過去が簡単にまた直ちに忘れ去られるがゆえに新しく見えるのだ。古い方法は新しい見え方で再現する」(NIV 注解)。

④昔の人々が思い起こされることはない。後の世の人々も、さらに後の世の人々によって、思い起こされることはない。

これは全面的に「是」と言えるかどうか。歴史に名を残す人もいるからです。しかし、「去る者は日に疎し」であることには変わりはない。「思い起こされる」とは、「人生をやり直す」というような意味でしょう。

以上のように、今日の箇所でも語られている一つひとつの皮肉を見てまいりましたが、読者はこれらの格言の裏側を読み取らなくてはなりません。語り手は何を伝えたいのか。それは、「神なしに生きる人生とはそういうものですよ」という警告なのです。人が神なしに生きるならば、その向かう方向は常に自分ばかりであり、自らを神とする以外に道はなくなっていく。そして、その人生の帰結は「永遠」ではなく、ただ「死」あるのみ。地上で懸命に生きたとしても何の益にもならず、この短い時間という枠内だけの空しい一生ではないかと言うのです。

【結論】

私も人生半ばに差し掛かり、時間の経過の速さが日々身に滲みしております。10年経つのが何と早いこと。このまま日々同じ動作を繰り返しながら死んでいくのか…と、ふとも思うこともあります。もし神とのつながりなく、ただの「作業」として生きたならば、この人

生はまことに空しいものとなるでしょう。しかし、コヘレトは言います。すべての営みを  
頌栄としなさい。どんなことでも神への賛美と結びついているならば、すべてが永遠的価  
値を持つものになると。本書は「神なしの人生」の空しさを皮肉を込めて徹底的に暴き、  
反対方向から神に近づく道を指し示しているのです。

### 【祈り】

万物を統べ治め給う神よ。コヘレトが言うように、見方によっては、人間とは地上で死  
にゆく一匹の動物に過ぎず、宇宙の藻屑でしかありません。永遠とも思われる宇宙の歴史  
の中で、100年に満たぬ一生とは何事の意味を持つのでしょうか。しかし、詩編の作者はそ  
のような宇宙を見上げながら賛美の声を挙げました。

あなたの指の業である天を、あなたが据えた月と星を仰ぎ見て、思う。

人とは何者なのか、あなたが心に留めるとは。

人の子とは何者なのか、あなたが顧みるとは。(詩編 8:4-5)

人間とは神に心を留めていただいている存在である。元来神とのつながりを持つべき存在  
として造られている。ただその一事の認識によって、私たちの人生は輝き始めます。与え  
られた人生の営みの一つひとつに頌栄を加えることができますように。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

宇宙全体の秩序を守り、且つ限りある人間に心を留め給う、父なる神の愛、

十字架の贖いにより、永遠のインマヌエルを實現に至らしめ給うた、主イエス・キリスト  
の恵み、

最初の産声から、最期の一息まで、人生そのものを頌栄となし給う、聖霊の親しき交わり  
が、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。